

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-002	ラオスにおける初等教育の環境整備のあり方に関する研究		
	ラオス	EDF ラオス研究所	2000.3 ~ 2001.3
	鈴木裕哉	明治大学	研究生

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

そもそもこの研究は、1998年の夏に国際NGOによるラオスのパクトンタイ村における小学校建設支援活動に実際に参加した体験から始まったものです。近年、ラオスのような発展途上で教育支援や建築支援などのNGA活動が盛んに行われ、実際に参加した支援活動もそのなかのひとつでした。NGO活動というものはそれ自体が長期的な草の根からの活動であるために、より現地の人々に密着し土着のものでなければなりません。

しかし、一方ではその活動が一局面に陥りやすく、ともすると何も現地に還元されていない場合すらあるのです。果たして、村に小学校が無いから建てる、児童が学校に行けないから教育支援を行う、そのような短絡的な解決によって地域の人々の生活に入っていくことが本当に国の発展や国際相互理解につながっていくのだろうか。これがNGO活動に直接参加しての感想でした。

そして、卒業論文において専門分野である建築計画学を通じてこのような国際NGOによる発展途上国における支援活動の詳細とその波及効果についてまとめ、さらに、NGOによる活動ではなく個人によって、建築の枠にとどまらずに文化人類学的視点から現学として諸問題をとらえ、このような学術研究を行ってみたいと思うようになり、対象を広げてラオスの初等教育の環境整備のあり方について児童の生活環境や教育環境の実情を把握し、その課題を明らかにしながら進める研究です。現地の人々の視点から、国の発展や国際相互理解につながっていくような研究になりうるように努力したいと思います。

進捗状況報告（半期毎の報告。文責は本人。表示されていない場合は未収録）

記入日：2000年9月30日

まず第一に、ラオスにおいて研究活動を行っていく上で大きな制約となっているのはビザなども含めた事務的な手続きです。未だもって特別ビザは下りませんし、また滞在期間中も常に政府の監督のもと活動を行わなければなりません。以前はその封建的な社会システムに不自由さを感じていましたが、活動を進めていくにつれ、その必要性を感じつつあります。そもそも世界最貧十カ国に属すラオスにおいて活動を行うことは、決して個人の研究の実績を高める為ではなく、純粋にラオスの発展や人々の繁栄の為に行われるべきだからです。ともすると忘れがちな大切なこの認識をもって日々の活動を振り返ってみると、そこには多くの現地スタッフや関係者の協力と指導、そして村人たちとの温かい触れ合いがあります。つまり研究活動を進めるにあたり、事務的な制約は障害ではなく、現地ラオスの現在の潮流と成長していくための源流とも考えられるのです。現地の限られた環境と制約のある社会状況を貧困の要因や障害と考えるのではなく、この国の明るい未来への希望として認識出来るようになったことは教

育を通じたこの共有活動を進めていく上で、大きな収穫だと思います。

次に都市部ピエンチャンの現況ですが、ラオスは本年度を観光年として観光客誘致に力を注ぎ近代化への扉を開いているようです。しかし一方では殺人事件ですら大きく取り上げられることなくメディアの発達は大変遅れています。また、資本や自由経済の流れが外から入り込みゆっくと豊かになりつつありますが、ラオスの素朴な部分が失われつつあることも事実です。都市部においては他人に物を乞う人が依然目に付きまじ、小さな子供が金銭を求め裸足で街をさまよう姿も目にします。タイの物乞いがコップなどを手に持ち布施を受けるのを受動的に待っているのに対し、ラオスのそれは直接手を差し出し、非常に積極的に布施を求めてきます。それは施しをしなければ生活出来ないという貧困を表すとともに都市部にある豊かさをも表しているような気がします。その豊かさが偏っているからこそ積極的にその隔たりを埋めようとするのではないのでしょうか。実際に農村部では皆一様に貧しいため、物乞いや他人に布施を求める人など存在しません。恵まれていない中でも共同体として、富と貧困を共有しひっそりと暮らしているからです。

また教育環境についてですが、都市部においては児童の教育環境はほぼ整備され、進学率や識字率の向上がみられます。また専門学校や語学学校も多数あり、学生たちの明るい表情がとても印象的です。小学校を見ても校舎の作りは依然劣悪ですが、生徒は毎日楽しく学校へ通っています。豊かになりつつある都市部において児童の教育環境を考えると、そこには環境整備という課題よりもその先に見られる豊かさへの認識という問題があるように感じます。ラオスにおいては自然の中で素朴に生きる人々の姿があり、生活のひたむきさと土の匂い自然の匂いがしっかりと根付いています。それは欧米諸国にはあまり見られないアジアの真の発展につながる根源であるように思うのです。都市が豊かになっていく過程では必ず失われていくものがありますが、ラオスの素朴さや生活のひたむきさは、たとえ近代化が進んだとしても守るべきもののひとつです。

例えば、ピエンチャンの朝市ではベトナムから出稼ぎにやってきた労働者が増え、両手に商品を山のように抱えながら、積極的に売り歩いています。その商売のやり方を見てもラオス人との違いが明らかにわかるのです。市場などで物売るラオス人はいかに威勢良く強引な売り方だとしても、決して他人に触れながら押し付けるような売り方はしません。少々強引な人でも、売り与えるというよりは売り分けるといった感覚です。ここにもラオスの豊かさへの認識と貧困の中で生きる人々の生活のひたむきさを感じる事が出来ます。

次に、農村部における活動の報告ですが、当初予定していた南部に位置するセコン県での活動は現地の天候と政府機関による認可などの問題によって、変更せざるを得なくなり、変わってラオス中部に位置するカムアン県の村において、実地踏査を行いました。カムアン県もラオス国内において最も貧しい地域にあたり、そこでの活動からは大変多くのことを学びとても充実した活動になっています。実地踏査を行ったナコントン村とブンファアナ村を中心に活動報告を致したいと思います。

まずはじめに、カムアン県の現況ですが、ラオスの人口480万人に対しカムアン県では約29万人の人口を擁し平均年収は330米ドルです。昨年度の小学生数は約5万人でそのうち進学率は78%でした。また、西にメコン河を境にタイと接しているため国境に近い市場ではタイからのたくさんの物であふれ、道路も他県に比べれば整備状況が良く、都市部においては衛生面も改善されたため生活基盤は安定しています。ただ、経済を農業に頼っているため、自然環境に生活を委ねているのが現状です。今年は例年になく雨が多く洪水によってカムアン県民が食べていけるだけの農作物の収穫が見込めず、多くの田畑や道路が水没してしまい、県知事の方も先行きに不安を感じているようでした。農村部においては、子供たちが農作業に従事しなければならず、進学率の低さと衛生面の悪さが問題となっています。未だにコレラに感染する子供も多く、早急な対応が望まれます。

ナコントン村はカムアン県の中心から35kmに位置し人口533人(うち女性274人)の小さな村です。村はお寺と建立してから40年が経つ学校を中心に形成されています。小川と田んぼが広がる中に高床式の住居が点在し、稲作や漁労、山菜の採集や水牛やニワトリなどの家畜を飼育しながら自給自足の生活を営んでいます。村では子供たちが元気に走り回り、家族や親戚を中心にして集落を形成し、自然の中で村として独自の小さな社会をつくり

ながら村人はひっそりと暮らしていました。

この村の初等教育の環境整備という問題を考えるにあたって、まず留意しなければならないことは既存の学校がどれほど機能し村の中でいかなる役割を果たしているかです。村に学校があるとは言え、子供たちの日常生活の中で学校へ通うという認識がどれほどあって、また村人の教育への関心がどれほどのものなのかを見極める必要があります。幸いなことにこの村には2年ほど前から日本のNGOの援助により生徒へ奨学金を提供し、学用品を授与するという教育支援が行われており、教育への認識と質の向上が顕著に見られています。学校には現在144名（うち女性73名）の生徒が通っており、村に住む就学年齢に達している生徒の全員が学校に就学していることは大変素晴らしいことだと思います。

ただし生徒の勉強の意欲や出席率の向上が見られる反面、就学は出来ても長く続かず中途退学してしまう生徒が多いことも事実です。既存の学校の老朽化や机と椅子の不足、学校備品の不足も深刻な問題となっています。このような現況を踏まえて教育環境の整備と発展について考えてみると、学校の校舎や学校備品などのハード面での改善以上に、学校というものの存在や授業内容の向上などソフト面での継続的な支援とそれに対する研究活動が最も大切である気がします。立派な校舎を建築するのも必要ですが、教育を村の人たち子供たちと考え、その村にあった方法で共に実行していく活動が必要であると感じるのです。この学校には教員が6名（うち女性1名）いるのですが、先生と話をしても生徒への思いやりや教育への熱意を非常に感じました。



【カムアン県ナコントン村の小学校】



【カムアン県ブンファナ村の子供と小学校】

実地踏査を行ったもうひとつのブンファナ村の現況は更に厳しいものでした。この村に住む人々は丘陵地ラオ族にあたり、少数で小さな社会を形成しています。人口は284人（うち女性167人）でこの村も米の収穫量の不足が問題となり、飲み水の不足も深刻です。古い学校校舎に対して111名（うち女性54名）が学校に通っていますが、劣悪な校舎にぎゅうぎゅうになりながらも懸命に先生の話や生徒の姿が大変印象的でした。この村の子供たちは貧しさに負けないくらい強く明るい笑顔を誰もが持っていました。

実地踏査によって現地のこのような状況を把握し、これからの活動ですが、新しい学校校舎の建築の必要性和実現性について現地の関係者と検討を進めると共に、ソフト面での研究活動も行っていきたいと考えています。例えば、村において子供たちが行っている農作業や家の手伝いを学校の授業の一環として捉え、先生と共に支援していく活動を計画しています。農作業を学校給食のようなかたちで行っていくことが出来れば、生徒の栄養面の改善にもつながり、何よりも学校生活の幅が広がり授業への興味と質の向上になり得るのです。併せて生徒の成長の記録を定期的に観測することは、栄養面だけでなくその村の教育の成長過程を調べる研究としても大変興味深いものになります。

ただ、限られた現地の環境と気候に左右されてしまう生活習慣の中でこれから具体的に研究活動を進めていくにはまだまだ課題が多くあります。しかし、この前半の研究期間を終えて次につながる希望もたくさん見付けることが出来ました。それは村で生活する人々の明るさと子供たちの元気な笑顔、個人的な研究活動にも関わらず助言と指導をして下さる現地研究所のスタッフや教育機関の先生方の優しさです。

ラオスの初等教育の環境整備の在り方を考えていくこの研究活動ですが、常にラオスの人々の立場に立って、子供たちの明るい未来のため毎日の幸せのためにささやかにでも関わられるよう、現地の元気な子供たちと共に育っていきたいと思います。

まとまりのない報告になってしまいましたが、この研究活動に際し、奨学金を給費して頂き、またいつも温かく応援して下さる貴財団に心から感謝しながら、残りの半年も悔いが残らぬよう精一杯努力し、元気に研究活動を進めてまいります。

成果報告書（留学後の報告。文責は本人。表示されていない場合は未収録）

記入日： 2001年5月7日

1年間のラオス留学を無事に終えて、実感としてわかったことはやはりラオスという国がいかに未発達で小さな国であるかということでした。研究を進めるにあたり最も苦勞したことは特別ビザの取得でしたし、研究計画やその詳細も常に所属機関を通じて政府の許可を得なければならなかったのです。一昔前ですとラオス政府も海外からの援助や研究者たちを進んで受け入れていたようですが、昨年から政府の方針が変わり、厳密な審査を経なければ個人による留学研究活動は大変難しくなりました。しかし、それはラオスがようやく自立しながら発展して行くための道筋を見出しつつあることでもあり、発展が遅れているからと言ってやみくもに海外からの援助や研究活動を受け入れるのは自粛しようということでした。世界最貧十カ国に属すラオスにおいて研究活動を行うことは決して個人の研究実績を高める為ではなく、純粋にラオスの発展と繁栄の為に行われるべきことなのです。現地に滞在中も海外援助によるいくつかの現場を訪れる機会があったのですが、残念ながらその全てが現地の人々にとって有益であるとは言えないのが現状でした。学校が無いからといってコンクリートの校舎を森の中にドンと建てて終わらせてしまっているもの。建設が進まずに中途半端に放置されている道路など。発展途上国において活動を行っていくことは貧しいから助けてあげる、援助を施してあげるという考えのみで進めていっては決していい結果を生み出すことは出来ないと思います。最も大切なことはお互いを尊重しながら相手の立場に立ってじっくりと現場を見て、共に暮らしながら、そこにある素晴らしい財産を守り、問題点の解決に尽力するということだと思っております。

研究も後半に進むにつれて、ようやくかねてから願っていたラオス南部地方セコン県において活動を行うための特別ビザを取得することが出来ました。そもそもこの研究は、1998年の夏にラオスのセコン県パクトンタイ村における小学校建設支援活動に実際に参加した体験から始まったものですが2年という歳月を経て、ようやく出発地点の村において活動を行うための環境が全て整ったのです。



【セコン県パクトンタイ村】

（豊かな自然の中に完成した小学校。ここで毎日たくさんの笑顔と希望が生まれる。小さな身体で一生懸命働く子供達。）

まず、セコン県の場所ですが、ラオス北西部に位置する首都ビエンチャンからバスで20時間ほどかかります。ラオスの中部地方から南部地方にかけては道路がまだ舗装されていないところがほとんどなのでその道のりは大変厳しくきついものでした。現地に向かうまでは様々なことを思い不安などもあるのですがこの20時間バスを体験す

ることによって邪念はいつも吹き飛んでしまいます。

南部の街バクセーまでバスで行き、そこからはバスを乗り換え更に3時間ほどで現地セコン県に辿り着きます。またバクセーからは隣のベトナムへ続く国道があり、多くの出稼ぎや観光客がこの街を訪れるため、交通や物流の要衝地として、バクセーは近年著しく発展を遂げている街です。しかし、それでも南部地域はラオスでも最も貧しい地域にあたり、まだまだ外から一般の人が入って行くことの難しい地域です。

次にセコン県の現況ですがラオスの人口480万人に対しセコン県では約6万8千人の人口を擁し、特別区を除いてラオスの中で最も人口が少なく、東にベトナムと接しています。およそ宮崎県ほどの面積に278の村があり、調査研究活動を行った、パクトンタイ村は県の中心から5kmに位置し人口684人(うち女性290人)のとても小さな村です。村は森の中にひっそりと高床式住居が点在し、近くにはセコン河が流れています。たくさんの緑があふれ、収穫時を迎えて黄金色になった畑が広がっていました。村人たちは稲作と漁労、山菜の採集や水牛やニワトリなどを飼って自給自足の生活を営んでいます。しかし自然環境に依存した暮らしは天候によって様々な問題を引き起こし、食べ物や飲み水の不足、慢性的な衛生不良による病気などが深刻な問題となっています。この村ではセコン河の水を沸かして飲み水を補い、雨水を貯めて生活用水にしています。子どもたちの健康状態も極めて悪く、成長期に十分な栄養を採れないために、子どもたちは心なしか小さく見えてしまいます。自然の中での厳しい生活、身体を酷使する力仕事。それでもこの村の子どもたちの笑顔は輝いていました。力強い生命力がとても印象に残っています。

ラオス南部地方は教育環境も極めて悪く、5年間の義務教育である小学校を卒業できる子どもは全国平均で40%に対し、9月に実地踏査へ行った南部カムアン県、そしてセコン県では10%前後になっています。こうした南部の農村地域では子どもたちは小さな頃から働き手として畑仕事に従事し、両親を助けるため、兄弟の世話をするため、家畜の世話など、ほとんどの子どもが学校へ通う余裕がありません。また中には教育を受けずに育ってきた大人たちの犠牲になり、あまりにもひどい仕事を強いられる子どもたちもいて、とても教育環境について考えるには及ばないような現状の中で生きている子どもたちもたくさんいました。現地での滞在が長くなるにつれて、これまで持っていた認識を遥かに越える貧困や悲しい現実に出会うことになったのです。



【セコン県ムンラパトム村 既存の小学校】

ボロボロの校舎で勉強している子供達。両親の手伝い、兄弟の世話や畑仕事などで、多くの子供が勉強を続けることができない。ノートや鉛筆などの学用品がほとんど無く、プレゼントしたカバンを喜んでくれた。

現地において当研究を続けるにあたり、小学校を建設する以前にもっと留意しなければならないことがたくさんあることを心から実感しました。

そもそもラオスがここまで発展の遅れている国である最たる原因は教育環境がしっかりと確立されていないからです。すし支援活動や研究活動はこの根源的な問題を常に考えながら、ラオスの潮流に合わせて行わなければ、一時の豊かさをただ与えるだけで真の繁栄にはつながって行かないはずだと思うのです。

ラオスという発展途上国において研究活動を行って来たのですが、それは喩えるのなら、現地の人々に美味しい「魚」を与えるための活動ではありませんでした。村で共に暮らしながら、これからどのようにしたら自分たちで魚を採って暮らして行くことが出来るのか、どのようにしたら、学校で勉強できる環境が生まれ、学校でどんなことをして、それは子どもたちの将来にどのようなことをもたらすのか。それを皆で考えて行くこと。言うならば、「釣り竿」を

現地の人々と共に探し、身に付けて行こうとする活動でした。

初等教育の環境整備における小学校建設という具体的な側面を考えてみても、現地バクトンタイ村において建設された小学校は、工夫と知恵によって現地の人々と共に建設を進めてきたものなので、そこには村人たち子どもたちの様々な願いや思いが込められています。

現地においては電気も水道もないため、建築を進めるには大変厳しい環境です。また近年ある意味で流行のようになっている、国やNGOによるラオスに小学校を建設する様々な支援活動がありますが、小学校建設を建築的にも熟考せずに、村に学校が無いからと言って安易に支援だけしてしまっただけでは、前述したように村に似合わない建造物がポツンと生まれてしまったり、あるいは建設の為に豊かな森林をどんどん切ってしまうと、結果的に元々あったラオスの財産すら失ってしまうことすらあるのです。

ラオスにおいては既存の小学校は方位や配置などを全く考慮せずに建てられてしまったため、教室内には直射日光が入り込んでしまい、とても蒸し暑くて子どもたちが勉強出来る環境ではないのです。またほとんどが木造で造りが大変劣悪になっていて、ブタや水牛が中へやってきたり、スコールによって校舎が吹き飛んでしまったりと、学校とは言えないような環境であるのが現状です。しかし、まだ学校らしきものが存在するだけよい方でラオスの農村地域ではまだまだ学校自体が足りません。

限られた現地の環境の中で小学校を建設するには村にある材料を使って建設しなければならず、考え出されたのが村に大量にあるラテライトソイルと呼ばれる赤土を使用することでした。この土に砂やセメントを混ぜ合わせ、手作りのプレス機によってブロックを作り出し、日干しすれば強度のあるレンガが生まれます。このレンガをいくつも積み重ねることによって、校舎の壁は出来上がります。この工法ですと、燃やす必要が無いために、村の森林を守ることもなるのです。屋根はいくつかの木材で梁をつくり、同じく現地で作り出した瓦を乗せて出来上がります。瓦の内側を白いペンキで塗ることにより電気の無い環境でも室内の照度を保つのです。他にも自然通風など様々な工夫がなされて完成したこの小学校は実際に、村の自然の中にゆったりと溶け込み、教室内は明るく涼しく、子どもたち村人たちの宝ものとなっています。

何よりも皆で造り上げた学校であるため、それぞれの思いや願いがしっかりと込められ、それがそのまま教育への熱意や認識にもなってきたのです。小学校建設というひとつの形を通じて、村の中に働く場が生まれ、労働への認識、教育への熱意が生まれ、学校で勉強できるという子どもたちの喜びと希望へと確かにつながっていきました。それはやはり、学校を外からポンと置いたのではなく、勉強するための場所、学ぶための釣り竿を村人みんなで手に入れることが出来たからだと思うのです。

ラオスの初等教育の環境整備の在り方を考えるにあたり、小学校建設は確かに大切なことのひとつです。子どもたちが安心して学ぶことの出来る環境を生み出すことは、その村にとってもラオスにとっても教育の発展へつながる起点として、もっとたくさんの地域で実行され、しっかりと研究がなされるべきことだと思います。しかし、小学校を建設するだけでは教育の発展にはつながりません。最も大切なのは、小学校が建設されたことによって村がどのように変わり、教育環境がどのように変化したのかという事後の様子を調査し、現状を把握することではないかと思うのです。そもそもラオスの農村地域では自給自足農家がほとんどで子どもたちも例外なく小さな頃から力仕事に従事しています。畑仕事をしたり、森に山菜を採りに行ったりと、炎天下での仕事は飲み水も十分に無い中で、小さな身体を酷使させているのです。厳しい生活を毎日精一杯送っている子どもたちが、それでも学校へ行って勉強を続けるというのは我々が想像も出来ないくらいの強い意志と体力が必要になり、事実、小学校へ就学しても続かずに辞めてしまう子どもたちが多いのです。

立派な小学校を建設するだけでは、教育環境を確立したことにはならず、子どもたちの勉強したいという思いや、厳しい生活の中でも楽しく学校生活を続けることが出来るように環境を整え、それを守って行くためには、小さなことを地道に続けること以外に道は無いように感じました。



【バクトンタイ村】

小学4年生の授業風景
教室にはいつも笑顔が
あふれる



バクトンタイ村には限られた環境の中で知恵を出し合ってみんなで建設した小学校が生まれました。この小学校には173名（うち女性74名）の生徒が通っており、村に住む就学年齢に達している子どもでまだ学校へ行けないのは7名です。ラオスで最も貧しいセコン県において、多くの子どもたちが学校へ行けない現状の中この数字は非常に高い教育水準であると言えます。これは日本のNGOが学校建設と共に子どもたちへ学用品の支援を併せて行っているため、学校へ行けないのは校舎が無いからだけではなく、子どもたちがえんぴつやノート、制服やカバンなど勉強するための学用品を手にする事が出来ないからなのです。

ラオスでは小学校の授業料は無償です。もちろん制服を着ていなくても授業に参加することは出来るのですが、他の子どもたちが綺麗な制服を着てノートを手にしていたら、それらを持っていない子どもは学校に行こうという気持ちにはなかなかならないのです。

この学校には6名（うち女性3名）の先生がいて、校長先生は村に住むお母さんですが、立派な校舎が出来たことは嬉しいけれど、まだまだ子どもたちが毎日楽しく学校で勉強出来る環境にはほど遠い、そう言っていました。滞在中は村の子どもたちと共に学校生活を送って来たのですが、毎日学校へ通うことがどんなに大変なのか体験してみなければ解り得なかったことにたくさん気が付きました。まず、村で共に暮らしていると、その生活の厳しさに驚かされます。朝5時には起床して家畜の世話をしたり河へ水を汲みに行ったりして、朝ご飯になるものをほんの少し口にするだけで、また畑や森に仕事に出かけます。子どもたちは7時には学校へ向かい、午前中の授業に参加して、11時半から2時間のお昼休みになると一旦家へ帰り、また家畜の世話や脱穀をして家の手伝いをするのです。休み時間というよりも、学校で授業を受けている時よりも働いている、そんな印象でした。午後になって再び学校へ行き、4時頃まで学校で授業です。学校が終わって家に帰るとまたただまっすぐに働くのです。小さな身体で本当に一生懸命働いている子どもたちの姿からはこちらが学ぶことがたくさんありました。土日になると子どもたちと一緒に畑仕事を手伝うのですが、生まれて初めて行った稲刈りにしても、森の中でのちょっとした仕事にしても、河を渡ることひとつをとってもいつも子どもたちに助けてもらっていました。日本で生まれ育った身体は以外にも身に付いていないようにすら感じてしまいました。

村には立派な学校があると言っても、周りには何もありません。授業中ブタが教室にやって来たり、体育の途中で水牛が入って来たりと子どもたちが落ち着いて勉強できる環境ではないので、校門になる柵を子どもたち先生たちと作る事になりました。もちろん村にある材料を集めて作らなければなりません。授業の時間を使ってみんなで知恵を出し合いながら柵を作る共同作業は教科書よりもたくさんの子どものことを子どもたちに教えます。重い木材を一緒に背負いながら運んだり、大きな石を使って竹を地面に打ち付けたりと、とても賑やかな授業です。また、元気がありあまる男の子はサッカーが大好きなのですが、校舎の周りには草や木々が生い茂り、思うように走り回ることが出来ません。そこで、草を焼き払い、地面を平らにして広い学校の敷地の中にグラウンドを作ろうということになりました。子どもたちが進んで取り組み、一生懸命作業を進めます。まだ完成していないにも関わらずどこかでサッカーが始まってしまい子どもたちの元気な声が広がって行くと、ここが本当に世界で最も貧しい国なのだろうかと思ってしまうほど豊かで幸せな気持ちになるのです。そこには貧困や生活のつらさは全く無く、心から笑い、授業を楽しむ子どもたちの笑顔があり、明るい強さと安堵感を感じました。

単に柵やグラウンドを作る作業ではあるのですが、ここには発展途上国における活動や現地の人々が豊かになって

いくためのヒントがあるように思うのです。学校では多くのことを学ぶことができます。子どもたちが自分の力で何かを見付けるための「釣り竿」をみんなで楽しく学び、身に付けていくところ。楽しいこともつらいことも共に分け合いながら学ぶところ、それが本当の学校だと思うのです。



【先生と子供達と学校の柵を作る.みんなの手により学校は作られて行く】

ラオスの初等教育の環境整備の在り方を考えてきた研究ですが、現地においてたくさんの村を訪れ、恵まれない環境の中で一生懸命生きる多くの子どもたちに出会って来ました。正直なところ、生活環境の厳しさや社会制度の違いなどに戸惑い、研究を行うことが困難になったり不安を抱えてしまったりする時期もありました。しかし、いつも周りには元気と力を与えてくれるラオスの子どもたちがいてくれて助けてくれました。彼らの笑顔が無かったらこうして無事に研究を終えて帰国することは出来なかったように思います。それくらい、経験してみなければわからない生活の本当のつらさやラオスが現在抱えている問題などに日々直面して来ました。この研究はラオスの子どもたちを貧困から救い、助けてあげるためにあったわけではなく、確かに恵まれてはいないけれど、共に暮らし、厳しい生活の中にある小さな喜びや苦しみを一緒にわけあい楽しいことも辛いことも子どもたちみんなと一緒に感じ、共に育って行きたいと願う、言うならば教育を通じた「共育活動」にすぎないのです。そしてラオスと日本だけではなく、いつの日かアジアの発展につながり、人々の小さな幸せに関わることが出来るのなら、これほど嬉しいことはありません。

そして、帰国して日本での暮らしに戻ってから感じることは「人と人との確かなつながり」があまりにも失われてしまっていることでした。毎日のように報じられる理解に苦しむ事件や社会現象はとても悲しく感じます。全ての根源には親と子ども、兄弟、友人、地域や社会などにおいて、人とのつながりが失われてしまったことがあると思うのです。アジアの中でリーダーシップを発揮しなければならぬ日本がこの状況であったらアジアに明るい未来があるとは思えません。確かにラオスは政治も経済も社会も教育も日本よりも遅れているのかもしれませんが、けれど日本のような理解に苦しむ事件はほとんど見られません。本質的な貧困や社会問題はもちろん抱えていますが、少なくとも「人と人とのつながり」が失われているようなことはないのです。富と貧困をしっかりと共有し人々がきちんとつながっているのです。ラオスにおける1年間の研究活動を終えて、アジアの発展と繁栄、人々の幸せのために謙虚に努力すべきなのは我々の方であることを実感しました。

最後に、こうして無事にラオスにおいて研究活動を行って来られたのは、何よりもいつも温かく見守って下さり、当研究に奨学金をご支援して下さい下さった貴財団の皆さまの応援があったからに他なりません。研究の成果がどれほど高いものになったか、現地の村に何かを届けることが出来たのだろうかなどまだまだ未熟な部分もたくさんあるのですが、これからもラオスの幸せのため、アジアの発展のために尽力して行きたいと思っております。

1年間、現地で元気に過ごして頂くことが出来ました。本当にありがとうございます。